奥秩父の沢ベスト7

永年、秩父の沢をくまなく歩いてきた奥多摩山岳会の第一線メンバーが、あなたを秩父の谷へ招待する……

奥多摩山岳会

奥秩父の谷のあらまし

奥秩父は深山幽谷をもって知られている。しかし、この奥秩父に大がかりな伐採が入って久しい。昼なお暗く、「通らず」を至る所に秘めた奥秩父の谷も、伐採と林道工事の土砂で埋められ、昔日の面影を失いつつある。林業で生計を立てている人たちを恨むのは、登山者のエゴであろうか。

以下、奥秩父にその源を発する谷について簡単に記してみよう。

◇多摩川流域

日原川　雲取山の東面に源を持つ唐松谷、大雲取谷とその支流小雲取谷は、奥秩父の雰囲気を充分に満たす谷である。

後山川　奥多摩湖の背水の上流に流れる後山川の上流には、三条沢、青岩谷、権現谷という中級向の谷がある。

滑瀞谷　丹波川の名勝・滑瀞の廊下の上で、小常木谷と火打石谷に分かれるが、ともに沢歩きのコースとして知られる。

一ノ瀬川　丹波川は青梅街道の一ノ瀬橋で一ノ瀬川と柳沢川に分かれる。一ノ瀬川は竜喰谷と多摩川流域一の悪さを誇る大常木谷を有する。

◇荒川流域

二瀬ダムより下流の大久保谷、細久保谷、川浦谷、大血川は伐採と林道工事のため、沢歩きのコースとしては興味のないものになってしまった。

大洞川　大洞川から和名倉山に突き上げている谷に和名倉沢、市ノ沢、惣小屋沢がある。荒沢谷とその支流の桂谷は、奥秩父北面の谷の入門コースといえる。栂沢、榧谷は大洞川を遡行してから入るため、谷で一夜を明かすことになる。川胡桃沢、井戸沢は伐採で埋まってしまった。

滝沢　和名倉山から荒川に直接注ぐ沢で、滝の数も多く、まとまっている谷だ。

滝川谷　滝の数、悪さ、規模からいって豆焼沢が一番である。滝川谷の源流水晶谷と古礼沢、ブドウ沢が古くから親しまれている。八百谷は一〇年ぐらい前に伐採で埋まってしまった。

入川谷　滝の数ではほかに引けをとらない大荒川谷と、荒川の源流真ノ沢は最も奥秩父らしい雰囲気を秘めている。

◇笛吹川流域

奥秩父の中心部にその源を持つ笛吹川はロマンチックなその名とは逆に、深山幽谷をもって知られている。特に一枚岩のナメで構成された滝と釜の美しさはほかでは見られないであろう。東沢は途中で信州沢と金山沢を分けるが、金山沢は美しいナメが連続している。

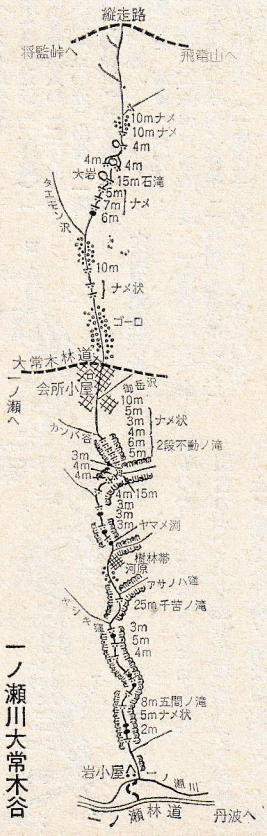
◇本谷川流域

本谷川は増富温泉より約四キロ上流で、金峰山の五丈岩に突き上げる批把窪沢と、大日小屋に突き上げる金山沢に分かれるが、ともに遡行価値は少ない。

◇千曲川流域

甲武信ガ岳はその名の示すとおり、甲州、武州、信州の三国界を成している。甲州に流れるのが笛吹川、武州に流れるのが荒川で、ともに立派な谷を源流としているが、信州に流れる千曲川は遡行価値がない。

（塚田信正・記）



一ノ瀬川大常木谷

多摩川流域一の悪谷——一ノ瀬川大常木谷

大常木谷は両側を岩岳尾根、モリ尾根といずれも大きな尾根にはさまれ、多摩川水系では有数のスケールを持つ幽谷。

青梅線奥多摩駅から丹波行の西東京バスで終点まで行き、ここから徒渉にて下降点まで約二時間である。下降点は一ノ瀬林道入口から約二〇分の道で広く切り取られた尾根であり、この尾根伝いの踏み跡を急下降するとちょうど出合に出る。

徒渉して大常木谷に入ると、しばらくは広く静かな廊下歩きである。突然連続して滝が現われるが、最初のポイントは五間ノ滝。腰までつかって取付けば、左手が直登可能。高巻きは左岸の岩場を取るが、足場はもろい。滝上に出ると両岸はさらに狭まり、小滝と廊下が連続し、幽谷の雰囲気は満点である。

ニヤシキ窪を越えると間もなく、前方に水煙が吹き上げ、静寂を破って二五㍍の千苦ノ滝が現われる。滝上でバウンドした豊かな水流は空中に吹き上げて落下し、迫力充分である。上部がハングして直登は難しく、左岸の壁を注意して登り、踏み跡伝いに進むとすんなり滝の落ち口に出る。しばらく進むと、谷は明るくなり河原が出てくるのでここを一日目の宿泊地としたい。

二日目、アサノハ窪を越えると山女魚淵にぶつかる。深く狭い淵でへずりは困難、右岸を巻く。左岸は大高巻きとなり、沢にもどる際、懸垂下降で降りることになるので注意。さらに美しい淵が連続する中を快適に進むと、左岸よりモミジ沢が一五㍍の滝を懸けている。やがて二段の広い不動ノ滝を迎える。いずれも右手を直登する。後は快適なナメ状の廊下をどんどん進むと両岸樹林帯となり、右岸に会所小屋の屋根が見えてくる。ここから右岸に大常木林道を一ノ瀬またはモリ尾根へ逃げることができるが、夏などは道が不明瞭である。

会所小屋の上部はしばらく平凡なゴーロ、ナメが続き、タエモン沢と別れ、石滝にぶつかる。この滝は大岩がかぶさり、その右手を水流が一五㍍落ちている。ここは左手の快適な岩場ルートを登って越える。さらに大岩に懸けた滝を二つ越え、ゴーロを進むと左岸にナメ状一〇㍍の沢が入り、うっかりすると本流と間違える。沢の分流を左岸に入り、さらに左岸のスラブ状の明るい流れに入る。

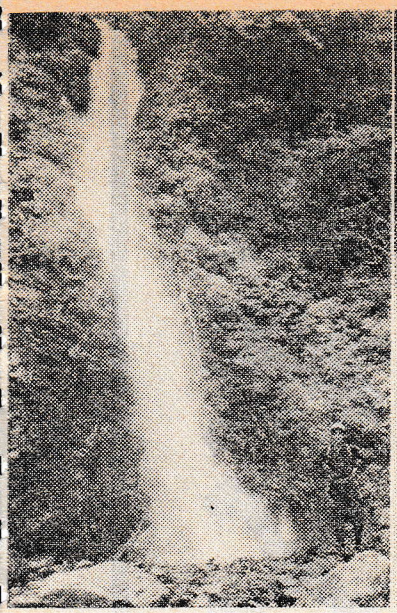
傾斜はどんどん増して、急登を続けると前方に縦走路の木橋が見えてくる。

縦走路からの帰路は将監峠から一ノ瀬へ下ってもよいが、飛竜山へ登り、ミサカ尾根を丹波へ下るのが最短時間である。

〈コースタイム〉

第一日 丹波（二時間）一ノ瀬林道入口（二〇分）下降点（三〇分）出合（一時間二〇分）千苦ノ滝（二〇分）河原

第二日 河原（二〇分）山女魚淵（一時間）不動ノ滝（一時間三〇分）会所小屋（一時間）石滝（一時間）縦走路（五〇分）飛竜山（一時間三〇分）サオラ峠（五〇分）丹波



左〉和名倉沢大滝　右〉大常木谷不動ノ滝

大洞川和名倉沢

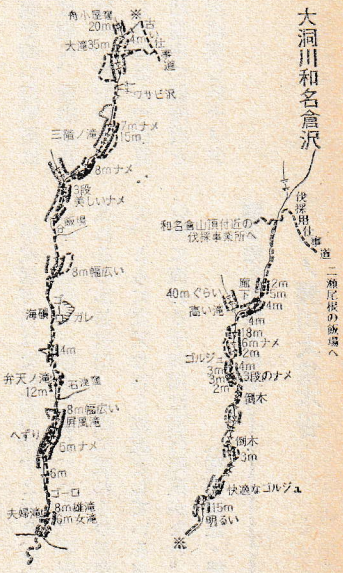
大洞川が二瀬ダムに入ろうとする所から、和名倉山（白石山）山頂目掛けて一直線に分け入る大きな切れ込みが和名倉沢である。この沢に秘められた大きな滝、青く澄んだ深い釜や淵、それは遡行者の行く手を阻み、また歓喜の声を挙げさせる。

二瀬ダムを渡り、三峰神社の有料道路の分岐点から少し二瀬ダムにもどった所から、ここならと思われるガレにルートを採って下る。出合は大きな切れ込みとなっているので、すぐにそれとわかる。

出合のすぐ上の滝から早速へずりが始まる。上に懸かる夫婦ノ滝は左を登る。上流はしばらくゴーロとなるが、その上は廊下になっている。左をへずりぎみに進むが悪い。

右から石津窪を迎えると、再び両岸は岩壁となって、一二㍍の弁天滝が行く手を阻む。左岸を大きく高巻いて上に出る。上流のゴーロとなって、左岸が大きくガレている付近を「海嶺」という。

数本の滝を越えると、右に飯場があり、この先から和名倉沢の核心部に入る。三段の美しいナメをへずると右岸に大きな滝となって氷谷が入ってくる。本流も三階ノ滝を迎え、ますますすごみを増してくる。三階ノ滝は先輩たちの記録によると、左岸を

2 最も雄大な規模を有する——

（藤井　諭・記）